

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2020年度研究成果報告書

研究科名	立教大学 大学院 現代心理学 研究科 心理学 専攻		
研究代表者 (2021年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名
	<input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 2年 <input type="checkbox"/> 博士後期課程 年 (学生番号: 19UM001D)		和田 恵 印
指導教員	所属部局・職		氏名
	現代心理学部・教授		大石 幸二 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	高機能自閉症児における命題的心理化の促進 — 命題的心理化と言語能力の関連の分析 —		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2021年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	現代心理学研究科 心理学専攻 博士課程 前期課程 2年		和田 恵
研究期間	2020 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 119,631円 / (採択金額) 150,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

高機能自閉症 (High-functioning autism spectrum disorder: HFASD) 児には社会性の困難がみられ、これは他者信念の読み取り困難が背景要因だとされている。また、HFASD 児の心の読み取り能力は言語能力との関連がみられるほか、定型発達児とは質的に異なる「言語的理由付け」による心の読み取り (命題的心理化) を行っていることが示唆され、これは学習させられるものである可能性が指摘されている。しかし、HFASD 児の言語能力のどのような側面が命題的心理化に関連しているのか、その詳細は明らかになっていない。よって、本研究では HFASD 児の言語能力と命題的心理化に着目し、これを調べるツールとして命題的心理化のプロセスを学習させるための社会的文脈を表す絵カードの開発を行った。(298字)

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 高機能自閉症 } { 命題的心理化 } { 言語能力 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 当初の目的と COVID-19 の影響による計画の変更**

本研究では、①高機能自閉症 (HFASD) 児が、日常生活場面で生じる他者との意図を含むやりとり (社会的文脈) を読み取る練習を行うために用いる絵カードを開発 (併せて絵カードに表現される描出内容の妥当性を確認) し、②その絵カードを用いて、HFASD 児を対象に命題的心理化の枠組みを学習させる介入を実施するとともに、語彙・文法・語用論といった言語学的能力の各側面から心理化 (Mentalizing) 能力との関連を検討する予定であった。

しかし、2020 年度においては COVID-19 (パンデミック) の影響により、緊急事態宣言や県をまたぐ移動の自粛要請などによって一都三県からの受け入れが自治体および教育委員会の判断で中止となり、埼玉県外で計画していた直接的な介入の実施が不可能となった。そこで本研究では、上記の① (すなわち、可能な限り絵カードの開発) に注力し、計画の一部についてはオンラインを活用するなどの工夫をして、予備的な調査に切り替えた。

2. 社会的文脈を表す絵カードの開発

上述のように、絵カードの開発にあたっては、当初は小学校に協力を依頼し、(1) 絵カードに用いるための子どもが経験する社会的エピソードの抽出、(2) 収集したエピソードの整理・選定、(3) 試作版絵カードの作成、(4) 作成した絵カードの描出内容の妥当性評価を行う予定であった。けれども、COVID-19 の影響により緊急事態宣言による全国一斉休校、外部からの研究受け入れの中止などにより、前記の (3) 試作版絵カードの作成を行った時点で、一旦、小学校と連携した調査を中断することとなった。そのため、作成した絵カードから定型発達児が十分に文脈情報の読み取りや登場人物の心情推測が行えそうか、「特別支援教育学」「臨床発達心理学」を専門とする国立大学准教授、「障害児保育学」「発達心理学」を専門とする短期大学准教授、「応用行動分析学」を専門とする公立大学准教授および「障害児心理学」を専門とする私立大学専任講師の計 4 名の専門家 4 名と協議を行った上で、代替的な調査を実施した。これらの専門家 4 名は、日常的に HFASD 児の観察を行い、介入研究を進めてきており、10 年以上の臨床経験を有することから信頼度の高い判定ができると考えた。これに加え定型発達児 2 名を対象とし、絵カードから細部の文脈情報を書き出してもらう課題を実際に行って、絵表現の妥当性に関する予備的な調査も実施した。今後、定型発達児および HFASD 児の研究参加者を増やしてリプリケート (追試的に、妥当性を確認する作業) を継続する必要があるが、後述する 4 (本研究で開発した絵カードの妥当性) にて説明する成果を得ることができた。

3. 絵カードの開発による成果と臨床的・研究的意義

そもそもこのような絵カードを開発する理由は、研究代表者自身が卒業研究において手がけた介入研究 (和田・大石、2019) において残された課題の解決を発端としている。HFASD 児を対象とした命題的心理化を学習させることは可能だとされながらも、介入に既存の絵カードを用いることが困難であるという背景があった。HFASD 児には「弱い中枢性統合」という情報を断片的に理解する傾向があり、そのために抽象的な文脈を見落とし、他者の心情の読み取りに失敗するという仮説が立てられている (Frith, 2003)。しかし、他者の心情を読み取るのに必要と考えられる表情や視線・発言内容などの文脈情報 (中村、1993) を明確化して提示すれば、HFASD 児もそうした細部の客観的事実を十分に参照することが可能であることが明らかになっている (和田・大石、印刷中)。HFASD 児は高い言語能力といった認知能力の補償によって断片的な事実の随伴性を理解し、そのような機能連関によって誤信念課題を解決するとして別府 (2007) の仮説にもとづけば、HFASD 児に命題的心理化を学習させるためには、まず、他者心情の推測に必要な個々の文脈情報が十分に描かれている「社会的場面」の代表例となるツールが必要である。しかし、既存の絵カードにおいては、登場人物の視線が指し示しているモノが何も描かれていなかったり、現実場面に存在しない空想の事物が現実の人間と同じ画面に描かれていたりするため、厳密な意味で現実の「社会的場面」を模した絵カードとして用いることが困難であった。

本研究では、実際に小学校児童の子どもを養育する保護者および学級担任経験のある教員を対象として、子どもが経験する日常の社会的エピソードを収集し、「社会的場面」として妥当な状況を絵カードに再現した。また、HFASD 児が文脈や心情の読み取りに注力できるように無駄な描出情報を省き、表情や視線など各部の情報を明確に描写している。そのため、本研究で開発した絵カードは、個々の社会的情報を読み取り、それらを言語的にまとめて (すなわち、情報を効果的に統合して) 総合的に状況の理解や他者心情の推測を行うという命題的心理化を学習させるためのツールとして適した構造になっている。このような絵カードは他に提示された例がなく、実践的な臨床場面や研究上の介入において、必要に応じて選択できるツールを提供するという点で、研究上の意義は大きい。さらなる妥当性の調査 (リプリケーション) が済めば、この知見の報告を行う計画である。

研究成果の概要 (つづき)

4. 本研究で開発した絵カードの妥当性

本研究では、抽出された絵表現の妥当性確認について、定型発達児 10 名程度を対象とした調査を予定していたが、COVID-19 の影響によって集団的な調査の実施が不可能(三密の回避)となったため、予備的な調査を行った。具体的には、定型発達児 2 名(A 児:7 歳、B 児:9 歳)を対象として、絵カードから文脈情報を読み取った上で登場人物の心情を推測し、絵カード全体のストーリーを要約させる手続きを採用した。この手続きは「十分な心情推測が可能な定型発達児にとって、本研究で作成した絵カードの絵表現は、正しく読み取りが可能なものかどうか」を検討するものであった。仮に、他者信念の読み取りを問題なく行えると推定される児童が文脈情報や心情の読み取りを試みた結果、読み取りに失敗してしまうのであれば、それは児童の読み取り能力が不足しているというよりも、絵カードにおける絵表現の分かりづらさの影響が強いと考えられる。

しかし、本調査においては、両児ともほとんどの絵カードにおいて文脈情報の読み取りや心情推測を十分に行うことが可能であった。このことから、本研究で作成した絵カードには、ストーリーの読み取りや心情推測を行うにあたり、明確で十分な量の情報が含まれていることが示された。つまり、文脈や心情を読み取る練習を行うためのツールとして、絵表現において“一定程度”の妥当性が確認できたと考えられる。“一定程度”としているのは、本研究に参加した定型発達児 2 名は、同世代ではなく、それぞれの年代を代表できる人数ではない(わずか 1 名である)ことが問題である。

ただ、7 歳の A 児はたびたび登場人物のセリフを読み間違っしまい、そのために絵カードに描かれている文脈を誤解してしまうことがみられた(「さくらちゃん『にも』やってみようよ」を「さくらちゃん『も』やってみようよ」と読み間違えるなど)。また、絵カードのストーリーの要約を記述する際には、A 児は事実をそのまま羅列する傾向がみられた一方、9 歳の B 児は事実を記述しながらも心情の移り変わりに言及し、かつその内容も具体的な傾向があった。HFASD 児は 9 歳前後でおよそ半数が誤信念課題に通過し、他者心情の読み取りが可能となるが(Happe, 1995)、この 9 歳程度の言語能力とは、社会的・文化的な知識に基づいた抽象的語彙を獲得する言語発達の節目であり、メタ言語的な操作によって心の理論の認知的な基盤であるとされる表象の表象(他者心情の推測)の足掛かりになる可能性が指摘されている(藤野・松井・東條・長内、2015)。本研究で開発した絵カードも、今後は 9~11 歳の HFASD 児を対象とした命題的心理化学習の介入に用いる予定であるが、本研究で十分に言語的な心情の記述が行っていた B 児が 9 歳であったことから、この年齢設定はある程度妥当であるということが確認された。つまり、HFASD 児がいわゆる第二水準の誤信念課題(メタ言語的な操作を要する心的課題)にも通過するようになる直前の 9~11 歳の時期に言語学的な側面における変化が生じ、命題的心理化の基礎が形作られることを今後検討していくことになる。

5. 今後の計画と使用した研究費の配分

本研究では、予備調査としての専門家による評価に続いて、2 名の定型発達児を対象とした。けれども、今後は絵カードの妥当性を確かなものにするためにも、より多くの 9~11 歳の定型発達児を対象として、課題を実施する必要がある。また、当初計画していた HFASD 児を対象とする言語能力の調査や、介入の実施も順次行っていく予定である。ただ、こうした介入の実施などを進めるために、今後の計画を推進する上で専門家との協議を行った結果、言語能力と命題的心理化との関連について、改めて整理する必要が指摘された。そのため、配分された研究費は、①専門家に対する助言への謝金のほか、本研究の学会発表時に活用し、今後の実験系を構築するためにも活用することができる、②書籍の購入、③言語能力の検査の購入にも割り当てた。言語学的側面の諸能力と命題的心理化の関連を探求する研究は今なお継続中であるが、これら購入した書籍や消耗品の一部は、2021 年度以降の研究においても有効活用できる。COVID-19 の終熄後、定型発達児および HFASD 児を対象とした調査計画・介入にただちに着手して、本年度蓄積するはずであった知見を得たいと考えている。なお、本研究における絵カードの開発や、今後の介入に応用可能な予備的な介入の実施についても、論文化および学会発表を行い、次年度以降の研究をスムーズに進めるための準備をすでに完了している。

6. 日本学術振興会特別研究員の採否

「立教大学学術推進特別重点資金(立教 SFR)大学院学生研究」終了後の研究継続のために、日本学術振興会特別研究員(DC1)に応募したものの、研究業績の不足や魅力的な研究計画のアピールを行うことができず、「不採用」となった。新年度より本学大学院現代心理学研究科臨床心理学専攻博士課程(後期課程)への進学が内定しているため、あらためて日本学術振興会特別研究員(DC2)に応募する計画であり、現在その準備を進めているところである。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

- (1) 和田恵・大石幸二 (印刷中) : 高機能自閉スペクトラム症児における文脈分析課題を用いた心情推察の予備的検討 人間関係学研究、26 (2021年12月25日発行予定) 【査読あり】
- (2) 和田恵・大石幸二 (印刷中) : 高機能自閉症児における命題的心理化の促進—社会的文脈を表す絵カードの開発— 発達研究、35 (2021年6月20日発行予定) 【査読なし】
- (3) 大石幸二・浅利真梨奈・和田恵・永川千夏 (2020) : 児童同士の賞賛が行動変化と学校適応感に及ぼす効果. 臨床発達心理実践研究、15、77-85 (2020年12月25日発行) 【査読あり】
- (4) 和田恵・大石幸二 (2020) : 高機能自閉症児における命題的心理化の促進—言語能力の違いがもたらす効果の検討— (中間報告). 発達研究、34、197-202 (2020年7月20日) 【査読なし】

④ その他 (学会発表)

- (1) 和田恵・大石幸二 (2020) : 高機能自閉症児における命題的心理化の促進 (2) . 日本特殊教育学会第58回大会 (WEB開催、主催校 : 福岡教育大学) . ポスター発表番号 P8-53.